中世城館調査の紹介

小柳和宏

はじめに

大分県教育委員会では、平成七年度より同十四年度までの八ヶ年計画で「中世城館」の悉皆調査を行っている。「中世城館」とは、中世に存在した軍事施設としての「城」と居住施設としての「館」の総称であり、県内ではおよそ四百箇所が知られている。[1] これらについて、その正確な位置、構造、伝承・記録などについて調査を行っているのである。そして、最終年度には報告書を作成し、中世城館を将来にわたって保護し、顕彰するための礎としたいと考えている。

ところで、調査には後述するように、作図にあたっての一定の技術や城館の理解が必要になるので、約四百箇所ある城館を目の前にした時、まず一番最初に問題になったのは調査体制であった。一体誰が山城に登るのか、これは同様の調査を進めている他県でも最初に突き当たる問題であり、最終的に成果が報告書に纏められる段階まで影響を及ぼす根本的な問題でもある。

大分県では、日常的に測量を行い、図面を描いていることから一定の作図レベルが保証されるという点や、地域に密着した活動ができやすく、調査成果がすぐに文化財保護行政に反映されるという点を重視して、大分県内を四つの地域に分け、その地域ごとに三から四の市町村教育委員会の文化財行政担当者を中心として地域調査員になっていただき、調査体制を整える事にした。平成七年度から筆者も含め県文化課の調査員も入れて、総勢二十名ほどで調査を行う事になったのである。

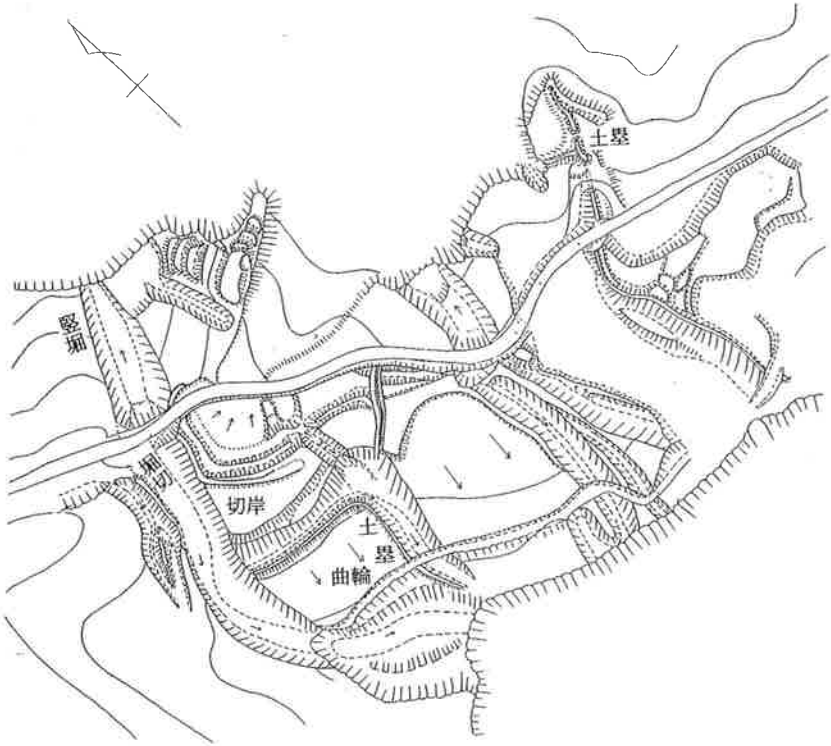
現在三年目が終了し、一応調査が軌道に乗ったので、これまでの調査状況を振り返りながら調査概要を報告する事にしたい。

一　調査の方法

縄張図を作る

まず山城を調査するためには、当然ではあるが目指す城のある山に登らなくてはならない。[2] 近世の平地に築かれた城と違い、中世では立て篭もるため、あるいは交通路の遮断のために高い独立的な山の上に城を築いているので、山肌を這い登りながの調査となる。山頂部に近いところには、城の施設として「切岸（きりぎし）」と呼ばれる人工的な急崖を作り出していたり、長い「竪堀」を何本も掘削しているため、なおさらやっかいである。しかし、現在では山は大部分人工林や雑木林であるため、平成三年の台風十九号による風倒木被害の大きさを実感しながらも、なお立木や下草に捕まりながらよじ登る事ができる。おそらく、築造当時の山の状況[3]を考えた時、赤茶色の土の肌が露出した斜面は、容易に人を近づけなかったことは想像に難くない。

調査は、城に登って終わりというわけではない。



第１図　山野城縄張り図（部分）（註９文献より・一部改変）

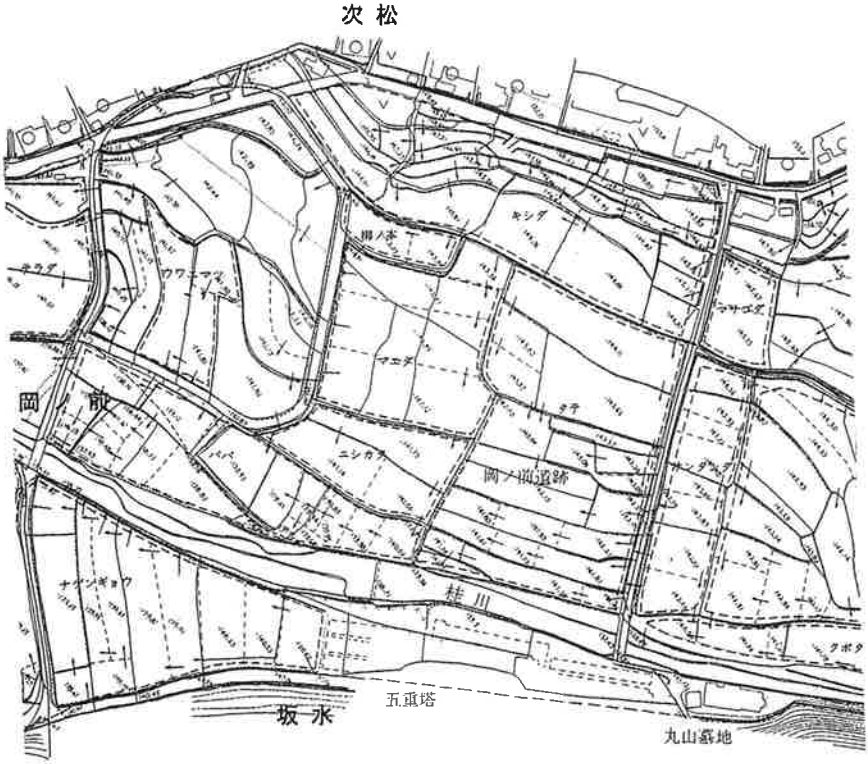
今度は簡易測量[4]を行いながら「縄張り図」と呼ぶ図面をとって行く作業がある[5]。当時、築造主体者はどのような意図のもとに山を削り、土を盛って城を築いたのか、それが今日まで地面に痕跡として残されていないかを、藪をかき分けながら探し、図化するのである。城に登り始めて一日目には気づかなかったことが二日目にはわかる、ということがしばしばあるほど、城の構造を一目で把握するのは困難なことが多い。何度も何度も同じ場所を行ったり来たりしながら、少しずつできあがっていく図面からようやく城の全体が浮かび上がってくるのである。

ただし、現在残されている城の痕跡は、基本的にその最終段階の姿を示すものであり、築造当初やその後の改変などをその縄張図の中から探し出す作業も必要になってくる。

地名・伝承を聞く

城のある山は「城山」などと呼ばれる事がある。または「城ノ〇〇」といった地名や「本丸」、「二の丸」などといった地名がある場合がある。これらは大部分通称で、直接的に城の存在を示す。

地名は、丘陵上や平地の城館の検出でも威力を発揮する。現在行政地名は「大字」と「小字」のみであるが、本来は土地の区画に応じてもっと細かな地名(しこな)がたくさんあった。現在の「小字」は、それらの細かな地名を統合してできたもので、決して本来の姿ではない。そこで、聞き取り調査によって地名の復元を行うのである。「地名」は本来意味のある最小の土地の単位に対して、ある目的を持って呼称するもので、中世にまで遡るものが多いといわれている。ある土地が、その歴史的使命を終え、土地の利用状況が一変した後まで人々の間で語り継がれ、地名として伝えられて行く。その地名を調べる事によって、逆にその土地の歴史的使命を推測できるというわけである。館があった場所には「堀ノ内」や「たち」、「たて」という直接的な地名が残ったり、領主の直営田である「前田」や「門田」などの地名が残り、間接的に領主の館の存在が推測できる場合がある。この地名と「旧字図」、さらに地元に伝わる城館にまつわる様々な伝承が加味されると、たとえ現地がすっかり姿を変えていようが、ある程度中世の館を含めた地域の景観を復元する事が可能となる。

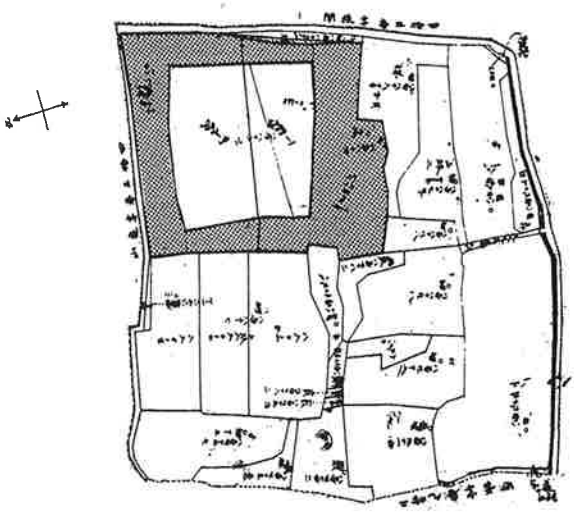


第２図　小字「岡ノ前」のしこな（点線で囲まれた部分がしこなの範囲を示す）
（註６文献より）

第2図は大田村の小字「岡の前」の中にあった「しこな」を聞き取りによって復元したものである。「たて（館）」、「前田」、「馬場」といった領主の館があったことを窺わせる地名が集中する。実際、「たて」の部分は圃場整備事業によって発掘調査されており、多量の中世の遺物が出土している。周辺の石造物や城郭（沓掛城）にまつわる伝承がいずれも田原氏に関するものである事によって、ここが田原別符の地頭であった田原氏に係わる「館」であると考えられる。[6]

旧字図を見る

高い山上の城の場合は、城の廃絶後近世以降の四百年間風雨にさらされながらも、おおむね崩れ行くままにその痕跡を止めている（廃城とともに意図的に破却された城もあるが）ので、城の縄張りを確認するにはとりあえず現地に行ってみるのが最も手っ取り早いが、低い丘陵上や平地の城館の場合は、後の



第３図　「乙谷屋敷」小字図
（アミかけの部分の地目は山林）

再開発によってかなりの改変を受けている場合があり、その場合には別な方法を取らざるを得ない。その時には、明治二十一年前後に調製され、法務局や市町村役場の税務課に保管されている「旧字図（地籍図）」[7]が大いに参考になる。そこに記された明治中期の地割や地目によって、城や館の構造が図面上である程度復元が可能となるのである。なぜならば、明治二十一年頃は、未だ重機による大規模な土木工事は行われておらず、中世を色濃く残すと想定される近世の土地の利用状況をかなりの確度で反映しているからで、そこから中世の土塁や堀の存在を推測できる場合があるのである。

第３図は中津市大字下池永字乙谷屋敷の旧字図である。小字は条里の一町四方に区画されているが、その四分の一、すなわち半町四方に地目が「山林」とされた部分が方形に巡るのが判る。これは、小字に「屋敷」がつくことからわかるように、現地調査を行っていないので詳細は不明であるが、堀または土塁の巡る「屋敷」、あるいは「館」と考えられる部分である。

発掘する

また、特に平地城館の場合には、地表面には一切痕跡を残さずに現在水田の下に埋没していることがある。この場合には、圃場整備事業などに伴い発掘調査されると、遺跡としての「館」跡が姿を現すことになる。発掘調査は、その場所がどのよう

に開発され、館として利用され、そして廃絶し、さらに再開発されていったかというプロセスを如実に示す。また、山城も道路建設などによって埋没した堀跡などが発見され、調査される場合がある。

このように、発掘調査は、現地表面痕跡を頼りに「縄張り」を解き明かす調査と違い、より具体的にある時点での土地の造作やその変遷、さらに建物やそれらに付属する施設を具体的に明らかにし、同時にそこで使用された「もの」も遺物として把握できるなど、生活や社会の一面を明らかにできる点で優れているが、すべての城館で可能なわけではない。実際、大分県内では開発工事に伴って十箇所程度の館跡で実施されているに過ぎない。今回の調査では、「発掘調査」という方法は例外を除いて採用しない。なぜなら「発掘調査」は最後の手段であり、それ以前に他のあらゆる方法を使って情報を収集しておくのが今回の調査の目的だからである。発掘調査は遺跡が壊されない限りはいつでもできるが、地表面痕跡を探る調査や聞き取りを中心とした調査は時間が経てばたつだけ成果が少なくなっていく。

文書・記録を読む

また、中世城館は文書や記録類にも登場する。築造（城誘（しろこしらえ）や普請（ふしん））に係わる文書や記録などからは、豊後国の守護であった大友氏の領国経営のための戦略が浮かびあがってきたり、戦さの中で城の果たした役割が具体的に見えてきたりする。県下に残された豊富な中世文書や、他県に伝わる文書、さらに近世になって編纂された記録などから「城」の記されたものを選び、カード化する作業を行っている。「記録された城」の姿を、それ自身では決して物言わぬ遺跡としての城跡と重なり合わせ、より表情豊かな城の姿を描けるように準備を進めているところである。

二　調査の概要と成果

ここでは、主に縄張り図作成を行った城郭の一部を各年度ごとに紹介し、これまでの調査の概要を述べることにしたい。

平成七年度

調査初年度の目標は、調査員の作図レベルを一定にすることにあった。というのも、縄張り図は普通の測量図とは異なる約束事があり、全国的に見るとさらにその約束事にもいくつかの「方言」が存在しているからである。調査員の共通理解を得るために、全員で大分市天面山城において縄張り図作成をおこなった。天面山城は、天正十四年島津氏が今の宇目町から豊後に侵攻した際、朝日岳城を守っていた大友氏の家臣柴田紹安が大友氏に背き、より府内に近いところに立て篭もった、まさにその城である。この城は大分市の公園になっており、ほぼ全域が見通しのきく測量には条件の良い城郭であった。主郭と考えられる部分から細尾根を北東方向に下った、城郭の先端部まで長さ三百五十メートルある比較的大規模な城郭であった。主郭東側には横堀を設けているが、その他は腰曲輪を巡らせている。派生する尾根二箇所は堀切で遮断し、細尾根に続く方向は段差のある切岸を築いている。この城郭は天正十四年に使用されていたことは明らかであり、横堀などはその際の築造になるものであろう。

その他、平成七年度には著名で実態のある程度あきらかな城館を選んで調査をおこなった。[8] 久住町山野城、安心院町佐田城、日出町鹿鳴越城、大分市千歳城、豊後高田市鞍懸城など十箇所である。これらはいずれも文書にも記載がありその存在があきらかなものであったが、城の規模や形状についての資料は皆無であった。実際に現地に行って調査を行うと、市街化でかなりの改変を受けていた千歳城を除き、いずれも保存状況も良好で、明瞭な遺構を目の前にした時驚きを感じるほどであった。

特に、山野城[9]は大分県内最大規模の山城であり、調査日数も他の城郭の数倍を要するほどであった。全体の規模は長さ八百メートル、幅百～百五十メートルほどで、堀の規模も他とは比較にならないほど大規模であった。さらに、古い記録から、それらが「田北堀」、「入田堀」、「志賀堀」などと呼ばれていたことがわかっており、歴史的な位置づけも解明できそうである。

佐田城も、山野城に比肩できる規模の城郭であるが、様相はまったく異なる。すなわち、山野城が堀などの規模を大きくすることによって防備を向上させようとしているのに対して、佐田城は中世城館の最も進歩した技術をつぎ込み築造しているの

が明らかになった。調査が全域に及んでおらず全体は不詳であるが、何度も屈曲し横矢を掛けられるようにした横堀、竪堀が連続する畝状竪堀など、県内ではもっとも美しい中世城郭に属する。残存状況も良好で、平成十年度には調査を完了させる予定である。

鹿鳴越城は、大友氏にとって別府湾北部を守る、すなわち府内の防備上で北の最重要城郭である。二つの鹿鳴越峠に挟まれた丘陵先端部に位置し、城郭の端からは別府湾を望むことができる。主郭に至る尾根上の二箇所を二条堀切っており、その一部は谷に向かって百メートル近く竪堀となって下り、最下部で合流する。頑丈に守られた主郭は比較的規模が小さいが、峠を守る城郭として良好な位置を占めている。

千歳城は、大分市東部の大野川下流域の平野を望む丘陵先端部を一辺百二十メートルに区画する「館」跡で、現状で幅七～八メートル、深さ一メートルほどの堀が部分的に残っている。大分市内では、上野にある大友館跡に匹敵する規模である。

鞍懸城は、同地に二箇所ある鞍懸城の内平野に近い独立丘陵上にある城郭で、扁平な安山岩を平積みする石垣があることで著名である。今回の調査ではこの石垣が全面に取り巻くことが確認され（総石垣）、石積みの技法は在地的ではあるが、全体のプランはあきら

写真１　調査風景（大野町高城）

かに近世城郭であった。ただし、城郭の手前側には、陸橋部を有する幅十メートルほどの堀切があり、以前の中世城郭の姿をかすかに示している。もう一つの鞍懸城は後述のように平成九年度に調査を行い、天正八年田原親貫の反乱の立て籠もりの舞台となった城郭はどちらか、という問題に一石を投じることになった。

平成八年度

平成八年度には調査体制も整い、計二十一箇所の城郭の縄張り図を作成した。特に、天正十四年に島津氏が豊後に侵攻した際に登場する城郭である宇目町朝日岳城や三重町松尾城を中心とした県南の城郭、国東半島に勢力を張った田原氏に関わる雄渡牟礼城、御所の陣、亀城などの城郭が調査の中心となった。

朝日岳城は、天正十四年に先述した柴田紹安が立て篭もった城で、細尾根の発達する山上の狭い場所に主郭を設け、四方に延びる尾根は堀切で遮断する。しかし、各曲輪の形状は不定形であり、ややあいまいな印象を受ける。

松尾城は、天正十四年島津氏が豊後南部の守りを破り、その中枢に攻め入るために占拠した拠点的城郭で、当時の状況が良好に遺存しているのが初めて確認された。標高二七六メートルの独立する松尾山の頂上から、麓の現吉祥寺に至る斜面に谷を取り巻く形で幾段にも曲輪を築いている。頂上部の曲輪(主郭)はほとんど加工がなされておらず、大野郡地域の城郭に共通する特徴を持っている。[10] あるいは、島津氏の利用は頂上部には至っていなかったかもしれない。いずれにしても、島津軍の豊後侵攻が、城郭の面から明らかになる日も近い。

一方、国東地方で調査した城郭はいずれも国東町にある。半島内陸部の小門山頂にある雄渡牟礼城は、南北朝期には文書に記載があり、その後も戦国期に至るまで文書に城郭名が認められる城である。基本的に田原氏の拠点的城郭であるが、天正八年の田原親貫の反乱に対応するため、大友氏が宗麟の子息である親家を雄渡牟礼城に入れた、とあり最終段階では大名である大友氏の意向が反映された城郭に改変された可能性が高い。小門山頂を長さ百二十メートル、幅四十メートルの平坦地を四段に渡って作り出し曲輪としている。周囲には腰曲輪を廻らせ、そこから四本の竪穴が掘られているが、基本的には容易に登っ

写真２　城遺跡（国東町）の堀切

てこられないほどの急な斜面である。

従前は、雄渡牟礼城周辺の城郭はまったく知られていなかったが、地元の雄渡牟礼城研究会の方が三箇所の山城を発見され、共同で調査を行った。その結果、「御所の陣」と呼ばれる場所に立派な山城があるのが確認された。それは、雄渡牟礼城のある小門山から伸びる尾根の一つが、広がりを見せやや平坦地を持つ部分に作られている。L字状に屈曲する平坦地を利用して主郭を作り、そこから派生する尾根をことごとく堀切りで遮断する。そして、小門山に連なる尾根に向いた方と、反対側の二箇所に虎口を設けている。大手と考えられる虎口は二度折れて曲輪に至るもので、途中横矢が掛けられるようになっており、周辺には一部石垣のあった痕跡も認められる。また、主郭の一部には横堀も認められ、虎口の形状と合わせ考えると戦国期末期の様相が認められる。

これらの状況からすると、文書に記載のある「雄渡牟礼城」が小門山の城郭である、とすぐに結論づけるのはまだ早い。今後の周辺部の調査の進展が期待される。

一方、田原氏の館と言われる亀城は、田深川を下流から約四キロ上流に遡った所にある比高五十メートルほどの丘陵先端部にある。丘陵上部は平坦で、広さは約六千五百平方メートルである。丘陵基

部とは二条の堀切で遮断し、その堀切は二重に螺旋状に曲輪を取りまく腰曲輪の一部をなす。虎口は螺旋状の腰曲輪が終わる、現在亀城神社のある場所と考えられる。腰曲輪の外側にはさらに二から三段の曲輪を設けるが、後世の開墾に伴う段もあり、どこまでが城か判断できないところがある。

また、平成八年九月九日には湯布院町において「歴史文化フォーラム・大友時代の城と館を語る」を開催した。千田嘉博氏（国立歴史民俗博物館助手）による「中世城館の見方」、玉永光洋氏（大分市教育委員会）による「大分の中世城館」の講演の後、前年度に調査を行った城館の調査報告を各地域の調査員が行った。約二百名の一般の方々の参加があり、城郭に対する関心の高さが窺えた。

平成九年度

平成九年度は中・小規模な城館を中心として二十箇所の調査を行った。その内から注目されるいくつかの城館について概要を述べたい。

平成七年度に調査を行った豊後高田市の鞍懸城から、通称「山香道」と呼ばれる道を南に一・五キロほど登り、奥畑の集落から見上げる山頂にもうひとつの鞍懸城がある。この両者には天正八年の田原親貫の反乱で田原氏が立てこもった鞍懸城はどちらなのか、という問題がある。両者の関係は、前者が古く後者が新しいと言われてきており、天正八年の鞍懸城は前者というのが通説であった。奥畑の鞍懸城は、岩場である山頂部とそこから二〇メートルほど下がった尾根上にある。周辺は国東地方独特の切り立った凝灰岩が立ち並び容易に人を近づけないが、北側に伸びる尾根だけは三条の堀切で遮断している。曲輪は平坦に削平しているのみで、土塁などは認められない。前述のように、平野に近い鞍懸城は近世初頭に総石垣の城郭に改変されており、比較できないが、両者には時期的な問題と共にその性格の違いも考慮に入れた議論が必要であると考えられる。

山香町と大田村の境にある金輪（かなわ）城は、まさに峠にある城である。小規模な山城で、二条の堀切に挟まれ、低い土塁の痕跡がわずかに残る主郭と、そこからもう一つの丘陵頂部に三段にわたって作られる曲輪で構成される。主郭からは山香町側が一望

でき、主郭からやや下がった位置からは山香に抜ける谷を望むことができる。

大野町田附(たづく)城も、やはり大野から大分へ抜ける現在の県道大野大分線を望む場所に作られた単郭の城郭である。一条の堀切で尾根から切り離された丘陵先端部に位置している。

このように、小規模な城郭が峠や山越えの道を望む場所に築かれる場合は、やはり交通路との関係が大きいと考えざるを得ないが、大友氏の領国防衛の全体の構想の中で出現したのか、あるいはもっと小さな地域の問題として存在したのかは今後の調査の中で明らかにせねばならない課題であろう。

他には直入町の松牟礼城と田北城の調査も行った。前者が田北氏の山城で、後者が館であるとの伝承を持つ。前者は、大野・直入地区では唯一、畝状竪堀を有する城郭であることが判明した。二条の堀切で画された城郭は、横堀とその外側から始まる九条の畝状竪堀で守られた西側に比べ、東側の守りは薄い。主郭は一段高い広さ四十平方メートルほどの部分で、切岸以外は施設は認められない。

一方、松牟礼城は比高差三十メートルほどの丘陵上に作られた城館で、規模の比較的大きな堀切によって主郭部分が守られている。

このように、「館」といわれるものは比高差が数十メートルほどで、歩いて麓から五分もかからない場合が多い。共通する点として頂部の平坦地が広く、斜面には小さな曲輪が比較的多い、ということがあげられる。他には、前記した国東の亀城や玖珠の古後(ごご)城がある。

また、平成九年八月二七日には、宇佐市において「歴史文化フォーラム・大友時代の城と館を語るII」を開催した。フォーラムでは小島道裕氏(国立歴史民俗博物館助教授)による「中世の城下町」、林一也氏(宇佐市教育委員会)による「宇佐の平地城館」の講演の後、前年度に調査を行った城館の調査報告を各地域の調査員が行った。県北の宇佐市や中津市など、広い平野が続く地域では、山城を築くのに良い山が至近に無いこともあって、平地に城館を発達させている。このような地域と山城が

発達する地域とで、中世の集落景観、あるいは館の景観がどのように異なるのか、という点は今後の課題として残された。

おわりに

以上、中世城館調査ではどのような調査を行っているのか、そして実際の調査によって何が判って、どのようなことが課題として明確になったのかを簡単に述べてきた。全県下約四〇〇個所の城館を相手にした調査で、重要資料の見落としや、調査の粗密もあると思われる。中世城館は、近世の城郭と違い必ず身近に存在するはずである(そのこと自身中世城郭の性格を表していると言っても良いが。)。我々の今までの調査でカバーしきれないそれらの城館の様々な情報をお寄せ頂ければ幸いである。地域のシンボルとして将来にわたって顕彰していくためにも、ぜひこの機会に地域に密着した調査ができればと考えている。

現在、大分県内の中世城館で国指定史跡になっているものは無い。県指定ですら二件しかない[11]。中世を象徴すると言っても過言ではない城館が指定されていない理由の一つには、資料の未整備がある。今回の中世城館調査はそのための基礎資料の整備、という意味合いが大きい。昭和五十五年に刊行された『日本城郭体系』[12]の大分県編の編者である三重野元氏は編集後記で次のように記している。「本県は、城郭研究については最もおくれており、城跡の発掘調査や実測調査も行われておりません。したがって体系的な分類や十分な考察も行われていない……」と。今、二十年近くを経てようやく三重野氏の言に応えられるようになりつつある。

注

(1) 市町村の教育委員会に照会したところ、計約四百箇所が確認されているが、「大分県遺跡台帳」ではおよそ三百箇所が周知遺跡となっている。つまり、存在が一応確実なのは約三百箇所ということである。ただし、今回の調査によって修正が必要なものがある事も明らかになっ

ている。

（2）あの山に城がある、と知っていても、どの尾根にあるかがわからないと必ずしも城にたどり着けるわけではない。また、そこに至る道も最近の山の変容によって判りにくくなっていることから、地元の人の案内が欠かせない。城館調査は地元の人の協力無しには成り立たないといっても過言ではない。もちろん、後述する城館に関わる地名や伝承を調査する場合にも協力をお願いする事になる。

（3）山に対する開発の頂点に山城が出現した、とする説がある。それによると、古代「黒山」と呼ばれた山は、「畑地」や「狩場」、そして「山城」という変化を遂げる中で、木はほとんど無い状態になっていたと考えられる。

飯沼賢司　「中世における山の開発と環境」『大分県地方史』一五四号　一九九四　大分県地方史研究会

（4）簡易測距器を用いて距離を測り、作図する。方位は磁石を用い磁北と目標物の角度を測る。

（5）ベースにする図面は、五千分の一の森林基本図を千分の一に拡大したものである。それに、透明なシートを重ね、そこに図面を描いていくのである。

（6）『豊後国田原別符の調査　I』一九九四　大田村教育委員会

（7）大分県では、旧字図を閲覧するには当該地に出向かねばならず、さらに必要部分の抽出、複写、張り合わせといった作業を短期間に行うのは不可能に近いので、今回の調査にあわせて旧字図のマイクロ写真撮影を行っている。これにより、二千分の一に統一された旧字図の閲覧が簡単にできるようになった。ただし、県下全域をカバーするのは期間的に不可能であり、いくつかの市町村にとどまる。

（8）その際には、基本的に県文化課から一名、地域調査員二～三名という体制で、一城館三日というのが通常である。

（9）『山野城跡』一九九六　久住町教育委員会

（10）大野郡の城郭は、地形的な制約があり山頂部には大きな平場を確保できない。細尾根の上をほとんど加工する事無く、切岸のみで明確な堀切を有するものは少ない印象を受ける。この様に、県内でも地域によって城郭の様相に差が認められるようである。もちろん、時期的な変遷も考慮に入れねばならないが。

（11）山城である宇佐市の光岡城と、真玉氏の館といわれる真玉町の真玉氏館の二箇所である。

（12）『日本城郭体系16　大分・宮崎・愛媛』　一九八六　新人物往来社

本文中で使用した写真・挿図の内、出典の明記していないものは大分県教育委員会文化課の許可を得て掲載したものである。

（大分県教育庁文化課　主査）